

結婚の生態

——アメリカ女性作家の自伝小説を読む——

大 井 浩 二

Synopsis: In *Marriage: Its History, Character, and Results* (1854), co-authored by Thomas Low Nichols and Mary Gove Nichols, it is declared that “Marriage and slavery are alike the grave of human liberty.” By discussing Mary Gove Nichols’s *Mary Lyndon*, Martha W. Tyler’s *A Book without a Title*, and Fanny Fern’s *Ruth Hall*, all published in the year 1855 in the genre of autobiographical fiction, this paper attempts to examine the ways in which their female authors confronted problems and conflicts in their own marital life as they were forced to endure slave-like conditions under their husbands’ tyranny and eventually undergo separation and divorce in male-dominated American society in the mid-nineteenth century.

メディカルライターで社会改良家でもあったトマス・ロー・ニコルズ（1815–1901）は妻のメアリー・ゴヴ・ニコルズ（1810–84）との共著『結婚——その歴史と性格と結果』（1854年）の彼が分担する第1部で，“The position of the wife under our marriage laws is so closely analogous to that of the African slave, that there is scarcely a break in the parallel between them.”（89）と指摘し，“Marriage and slavery are alike the grave of human liberty.”（96）と主張している。

さらに彼は “This ownership of women, by men—this absolute right of one human being to control the life of another—this essence of all despotism and slavery, is held up as the necessary condition of civilized virtue.”（115）と論じた後で、1848年7月にニューヨーク州セネカフォールズで開催された女性権利大会でのマニフェストである「所信の宣言」から，“The history of mankind is a history of repeated injuries and usurpations on the part of man toward woman, having in direct object

the establishment of an absolute tyranny over her.” (qtd. in *Marriage* 115–16) という言葉を引用しながら, “the marriage institution . . . is the center and soul of the whole system of wrongs of which she complains.” (117) と言い切っている。

本稿では、トマス・ニコルズが女性にとっての諸悪の根源と考える 19 世紀アメリカの結婚制度の実態を、いずれも『結婚』の翌年の 1855 年に発表された女性作家による 3 冊の自伝小説のなかに探してみたい。

1. メアリー・ゴーズ・ニコルズ『メアリー・リンドン』

『結婚』の翌年、トマス・ニコルズの妻メアリー・ニコルズは自伝小説『メアリー・リンドン』を出版しているが、そこには彼女の不幸な結婚生活が赤裸々に語られている。メアリー・ニールとしてニューハンプシャー州に生まれた彼女は、1831 年、21 歳のときに彼女とはほぼ 40 歳の年齢差のあるハイラム・ゴーズと結婚して、翌 1832 年に 1 女をもうける。彼女はマサチューセッツ州リンで女学校を開いたり、ボストンで若い女性のための連続講演会を催したりしているが、専制的な夫との生活に耐えきれなくなった彼女は 1842 年に夫と別居、ようやくゴーズとの離婚が成立した 1848 年にトマス・ニコルズと再婚している。

メアリー・ニコルズが『メアリー・リンドン』という 388 ページもの長編を書いたのは、みずからの不幸な結婚を材料にして、結婚という制度に内在するさまざまな問題を指摘するためだった。リンドン自身, “[W]hen I reflect that on this sunny day of our Lord, 1854, thousands [of women] are bound by law and custom, and their own fearful weakness, in just such a moral paralysis, I ask, Why do not the stones in the street cry out against such death-dealing with ‘the life that now is, and which is to be’—‘*which is to be?*’” (125; emphasis in original) と語っているように、非人間的とも言える結婚制度の下で悲惨な生活を送ることを余儀なくされている何万もの女性たちの代弁者として発言するためだったと言い換えてもよい。

主人公メアリーの夫アルバートは事業に失敗して無職の身となるが、“women have no right to property or the freedom of action that men enjoy” (130) と公言してはばかりず、彼女の学校教師としての収入はすべて夫のものとなってしまう。このような不当なことが自由の国アメリカで許されるはずがない、と読者は思うかもしれないが、“I tell you, before God, these things have been done; I suffered them.” (130) と彼女は語っている。結婚生活に疲れ果てた彼女が別居を申し出ても、認められるはずもなく、やがて彼女は夫のもとから逃げ出すが、ひとり娘は連れ去られ、この件をめぐる裁判沙汰にまで発展する。孤立無援のメアリーとしては、“an appendage, a thing with no will of my own” (131; emphasis added) となり果てた身の不幸を嘆くしかないのだが、『結婚』の彼女が分担した第2部でも、夫に依存するしかない女性を“an appendage of man, to be governed and protected by him” (191) と呼び、“Woman must be an appendage of man, really a slave, till she can sustain herself.” (196) と主張していることを付け加えておこう。

さらに結婚とは何かという問題について考えたメアリー・リンดอนは、“What constitutes true marriage?” と繰り返しみずからに問いかけた結果、“A conviction had long been growing within me that marriage without love was legalized adultery.” (135) と告白し、彼女の稼ぎを奪い取って、それを勘定することに喜びを覚える守銭奴と化した夫と生活を共にする苦痛を訴えている (136)。“Every time he approached me, or laid his hand on me, a convulsive spasm ran over my whole system, giving me indescribable pain. I could not overcome it.” (137) という彼女の言葉は、19世紀の小説らしい間接的な表現で“marital rape”に言及していると受け取っていいだろう。

『メアリー・リンドン』の前半部では、こうした結婚生活に関する不平不満が延々と語られているが、それがただ単に主人公の個人的で例外的な経験ではなかったことは、すでに触れたセネカフォールズ女性権利大会で承認された「所信の宣言」に列挙されている男性の暴挙の実例が証明している。そ

こには “He has made her, if married, in the eye of the law, civilly dead.” とか, “He has taken from her all rights in property, even to the wages she earns.” とか, “He has endeavored in every way that he could, to destroy her confidence in her own powers, to lessen her self-respect, and to make her willing to lead a dependent and abject life.” (qtd. in *Marriage* 116) とかいった男性を弾劾する言葉が書き連ねられているが、そのすべてが主人公が味わうことを余儀なくされた事柄に正確に対応している。読者としては、この小説を書きながらメアリー・ニコルズは「所信の宣言」を参照していたのではないか、と思いたくなるに違いない。

メアリー・リンドンとはまた、苦難に満ちた彼女の日常生活のなかで, “I had begun to be somewhat conscious that, as a human being, I had ‘a right to life, liberty, and the pursuit of happiness.’ There was only the dawning of this truth in my mind.” (211) と述べて、アメリカ独立宣言で謳い上げられていた “unalienable rights” に言及しているが、「所信の宣言」の前文にも、やはりこの独立宣言の言葉が呼び込まれていた。このようにして、7年前のセネカフォールズ女性権利大会と密接に連動している小説『メアリー・リンドン』は、著者メアリー・ニコルズのきわめてプライベートな、いわば小文字の「所信の宣言」として読むことができるのではないだろうか。

すでに触れたように、『結婚』のトマス・ニコルズはアメリカの既婚女性が奴隷と同じ状態に置かれていることを指摘していたが、『メアリー・リンドン』の作者もまた, “Has it occurred to you, before perusing these pages, that a being, who had no right of property, and therefore no independent will, and no right to her children, and who cannot be sold, and thus have the *chance* of a better master, has somewhat of a parallel life with that of the negro slave . . . ?” (269; emphasis in original) と読者に問いかけている。この小説の結末において、主人公は女性にとって最も望ましい理想的な未来世界を思い描いているが、その世界では女性はもはや “an appendage, a parasite of man; a thing, a creature having no

independent existence, but subject to the will of an owner-husband” (386) ではないことが明らかにされている。

『結婚』において結婚制度と奴隷制度の共通点に注目したニコルズ夫妻は, “Marriage is now to have its abolitionists; its ‘Uncle Tom’s Cabin’ is to be written.” (95) と語っているが, “self-ownership” (214) を手に入れて, “legal harlot” (214) の地位から解放された未来の女性が “a right to life, liberty, and the pursuit of happiness” を行使している姿を思い描く『メアリー・リンドン』は, “the *Uncle Tom’s Cabin* of the marriage institution as Mary and Thomas had hoped” (Silver-Isenstadt 187) として読まれてしかるべきだろう。

2. マーサ・タイラー『題名のない本』

マーサ・W. タイラー (c.1819-?) の自伝小説には『題名のない本』という奇妙な題名が付いている（翌 1856 年に増補版が上梓されている）が、サブタイトルに名前が出ている主人公マーラ・デイナのイニシャルが、結婚前の作者の実名マーラ・デイモンのそれと同じである点からも察せられるように、この作品はマーサ・タイラーの生活と意見をかなり忠実に再現している。

1855 年版の序文でタイラーが “there are many of my sex suffering worse than death from the hands of men who have sworn before God to love, honor, and protect them” (iii) と述べ、彼女の作品を “a scaffold for the hanging of such men’s reputations” (iii; emphasis in original) に譬えているのは、そうした神を畏れることも女性を愛することもできない男たちの “brutality” を阻止する手段は “open exposure” しかないと考えからに他ならない (iii)。そして, “many who merit the same fate as those already undergoing punishment, are yet unmolested, defiant in their wickedness” と主張する彼女は, “So up with your platforms, ladies, and weary not in the work till our land is free from these monsters in human form.” (iv) と女性読者に呼びかけている。このように悲惨な結婚

生活を送る女性の状況を訴える『題名のない本』の主題は『メアリー・リンドン』のそれと同じであり、“If this book should be instrumental in saving a single sister from sorrows like those which befell the heroine of its pages, then my labor is not in vain.” (iv) という序文の言葉は、そのままメアリー・ニコルズの作品にも当てはめることができるだろう。

『題名のない本』の主人公マイラ・デイナはマサチューセッツ州の田舎町ランカスターの自然のなかでのびのびと暮らす少女だったが、やがて 16 歳になった彼女は、家計を助けるために同州ローウェルの工場町で織工として働き始める。だが、ほどなくして工場の経営者たちが女工たちのただでさえ低い賃金を切り下げることと決定し、この事態に対応するために開かれた緊急集会で委員長に選ばれたマイラの指導の下で、女工たちはストライキに突入する (21-30)。『題名のない本』は “an actual strike, the 1836 ‘turn out’ (as strikes were called at the time) of Lowell mill women” (Ranta 17) を扱っていると主張するジュディス・ランタは、ストライキを描いた箇所を “the novel’s most stirring scenes, glorifying Mira and other women strikers for their courage and independence” (Ranta 19) と称賛しているが、ここでは 1837 年 1 月に終結したストライキに勝利したマイラが経験することになる “thrilling events” とは何だったかについて考えてみたい。

ジュディス・ランタの考証によると、実生活におけるマーサ・デイモンは 1837 年 11 月 1 日に船長のヘゼカイア・グラントと結婚している (Ranta 21) が、小説に登場するメルリ・グレイ船長はフランスはボルドーの港でマイラの活躍ぶりを耳にしたのがきっかけで、彼女に求婚したのだった (31-61)。だが、この結婚生活は長続きせず、グレイ船長は海の事故であつてなくこの世を去ってしまい、その後、マイラはハーバート・ティレルという人物と再婚するという設定になっている (88) が、実生活でのマーサがハイラム・タイラーと結ばれたのは 1842 年 1 月 19 日のことだった (Ranta 21)。マイラが最初に出会った時のハーバートは “a quiet exemplary young man, to all appearances” (81) に思われたが、彼がいつも浮かべている微

笑は “a thin covering to a sinful, darkened heart” (86) だったことがやがて明らかになってくる。

マイラは3人の子どもに恵まれるが、『題名のない本』は彼女の結婚生活が決して幸福ではなかったことを示している。再婚相手のハーバートは “If he ever married, it would be to have a wife to wait upon him.” (87) と眩くような男であり、語り手もまた “All he asked was a wife, as a necessary piece of furniture—a passive being who would never murmur or complain.” (87) と付け加えている。こうした彼の専制君主的な態度は、物語の終わり近くになっても変わることはなく, “I’ll show that woman [Mira] that though the ‘church can incorporate two in one,’ that the husband is her lord and master still, and her rights and wishes must yield to his. Woman’s rights indeed! What are they? To bake a johnny cake and nurse a baby!” (253¹) とうそぶく彼の姿が描かれている。そこには真の女性は家庭と呼ばれる領域で家事と育児に勤しむべしという家父長制的な主張が露骨に表明されている。

ハーバート・ティレルの人間性について、語り手は *Love! he knew nothing of that great, holy, pure principle. The feeling that filled his heart was low and sordid.*” (87; emphasis in original) と語っているが、そのような冷酷無情な夫との生活が “They had not been married long, ere Mira saw that her future was dark and uncertain: her path, at best, a rough one.” (88) と説明されているとしても不思議はない。たとえば、ある時期、一家が暮らしていたジョージア州でふたり目の子どもが生まれた時には, “How she had suffered during her illness, from her husband’s unkindness. He had gone so far as to refuse her a physician at the time of her confinement.” (109) と書かれ、その後も “Her husband treated her with the same cool indifference and carelessness that he ever had done since they made their home in the sunny South.” (111) と語り手は説明している。結局、ティレル夫妻は別居を何回か繰り返し、3人の子どもの親権をめぐる裁判を起こしたりすることになるが、その泥沼状態のなかで書

き綴った結婚生活をめぐる原稿をマイラはボストンの出版社に 1,000 ドルで売り込むことに成功する。

その原稿を準備しながら、Mira は “the dawn of that auspicious day when clasping her children to her breast she could say, ‘I have a home for you, precious darlings—we will be separated no more on earth.’” (249) を夢見ていたのだったが、『題名のない本』の最終頁に登場する彼女は、原稿料で手に入れた家で年老いた父親とふたりの娘と一緒に幸せに暮らしている。息子のハーバートはまだ夫に引き取られたままだが、“and with an eye of faith, she is looking forward to the time when her beautiful boy will again be folded to her bosom.” (260) という説明は、息子もまたやがて彼女のもとに無事に戻ってくることを暗示している。“Reader, is not Mira fast realizing her dreams.” (260) という語り手の幕切れの言葉は、『題名のない本』がハッピーエンディングを迎えたことを物語っている。

ところが、その翌年の 1856 年にマーサ・タイラーは増補版を急遽出版しているだけでなく、「読者へ」と題する新しい序文で 1855 年版の “Dreams Realized” と題する最終章は “merely imaginative” (vii) だったということ認め、新しく書き下ろした 40 頁ばかりの増補部分で彼女の置かれた状況がまったく好転していないことを明らかにしている。ハーバート・ティレルは性悪な妹と結託して、妻のマイラを経済的にも精神的にも追い詰めることをやめないし、あくまでも男性に有利に働く法律は、彼女が子どもたちと一緒に暮らすことを許さない。マイラを苛め抜くハーバートに向かって、語り手は “[G]o on in your course of cruelty and oppression—your insulting taunts—your baser lies, and you change the woman in heart to the fierceness of a lioness bereft of her young; Mira Tyrrell can die; but she cannot bow her free soul to the galling yoke of slavery.” (268) という言葉を投げかけ、マイラに向かっては “We pity the mother held in the chains of slavery; but, Mira, you are even more to be pitied. Your bondage is ten thousand times more galling and oppressive; alas! we cannot help you while the accursed law which gives to the father unconditionally the

sole right to the offspring remains upon our statute books.” (285–86)と語りかけている。結婚制度と奴隷制度を “the grave of human liberty” と規定していた『結婚』の主張があらためて思い出されるのだ。

1856年版の『題名のない本』の最終章では、主人公マイラは “an alien from home and children” (297) となって, “the walls of prejudice which are built up around all women who do not live with their husbands” (297) の前に立ち尽くしている。1855年版の結末の希望にあふれた彼女は “and with an eye of faith, she is looking forward to the time when her beautiful boy will again be folded to her bosom.” (emphasis added) と描写されていたが、増補版の最後では “and with an eye of faith she is hastening onward to a more congenial clime, hoping and trusting to be united in bonds of never-ending harmony to her loved ones in that blissful land, where ‘the wicked cease from troubling and the weary are at rest’.” (298; emphasis added) に引用されている旧約聖書ヨブ記第3章第17節の言葉が示すように、マイラの絶望的な目は天国に向けられているのだ。

初版の結末がマイラの夢見ていた理想を描いていたのとは対照的に、再版の結末には彼女の直面する現実が示されている。『題名のない本』の2つの異なる最終章には、理想と現実の狭間で引き裂かれた主人公マイラの、そして著者マーサ・タイラーの苦悩が投影されていると言い切ってもよいだろう。その苦悩が同時にまた結婚制度の下で呻吟する女性たちすべてのそれであったことは, “Mira Dana is conscious that her history is only one among thousands where women are dragging out lives of indescribable misery chained by the laws of our land to men who have ceased to be worthy of their love, and forfeited every claim to their respect by their selfish cruelty and their willful neglect.” (vii–viii) という増補版の序文の言葉によって裏付けられている。

3. ファニー・ファーン 『ルース・ホール』

これまで考えてきた2冊の自伝小説と比べると、ファニー・ファーン（本名 *Sara Willis Parton, 1811-1872*）のベストセラー『ルース・ホール』²はずっと高い知名度を誇っている。彼女と同時代の女性ベストセラー作家たちを“a damned mob of scribbling women”と呼んで非難したナサニエル・ホーソンが『ルース・ホール』に関しては、“I must say I enjoyed it a good deal. The woman writes as if the devil was in her; and that is the only condition under which a woman ever writes anything worth reading.”（qtd. in Warren 121）と述べていることもあって、ファニー・ファーンの長編第1作は早くから積極的な再評価を受けている。だが、ニコルズやタイラーの作品とは違って、この小説には19世紀半ばの、女性にとって悲惨な結婚制度をめぐる話題は一切扱われていないではないか。同じ年に出版された自伝小説というだけの理由で、3人の女性作家の作品を同列に置くのはいかなるものか、という意見が聞かれるとしても不思議ではないだろう。

『ルース・ホール』の主人公は幸福な結婚生活を送っていたのだが、最愛の夫ハリーが腸チフスに罹って急死した後、ふたりの娘を抱えて生きていくことを余儀なくされる。だが、貧困に喘ぐ彼女を父親も亡夫の両親も冷たく遇するばかりで、ほんの僅かな金銭的な援助しかしてくれない。困り果てた彼女は貧民街の下宿屋で暮らすことになるが、学校教師やお針子の仕事では生計を立てることができず、窮余の一策として新聞への投稿で生活費を稼ぐことを思いつく。最初、助言を求めた有力な編集者の兄にはすげなくされるが、やがて **Floy** というペンネームで書いた記事が少しずつ売れるようになるだけでなく、書きためたコラムを集めた単行本によって一躍ベストセラー作家となった彼女は、自立した女性としての収入と地位を手に入れる。ファニー・ファーンの代表作『ルース・ホール』は女性がアメリカン・ドリームを実現する物語として読まれているが、そこには成功に至るまでの主人公の困難な状況は描かれていても、夫との美しい思い出のなかに生きているルース・ホールは、女性に容赦ない19世紀アメリカの結婚制度などとは無縁な存在のように思われるかもしれない。

この小説には作者ファニー・ファーンの実生活に起こった出来事がほぼ忠実に再現されている、というのが定説だが、まことに奇妙なことに彼女の再婚をめぐるエピソードはそこからすっぱりと抜け落ちている。夫チャールズ・エルドレッジの死から3年後の1849年に、彼女はサミュエル・ファリントンというボストンの商人と結婚しているが、彼女の再婚は惨憺たる失敗だったらしく、わずか2年後には別居に追い込まれ、さらに2年後には離婚が成立している。ジョイス・ウォレンによると、この再婚をファニーの娘エレンは“a terrible mistake”と呼び、孫娘エセルはファリントンについて“He was a madly jealous man—not merely in the usual sense, but jealous of all his wife’s friends, male or female; of her popularity; of every interest of any kind outside his own four walls which she might manifest.”と語っている（Warren 83）。さらにウォレンは“In addition to his jealous and abusive behavior, there is reason to believe that Farrington was sexually repulsive to his wife.”（Warren 84）と付け加えている。この男との不幸な再婚をファニー・ファーンが『ルース・ホール』に持ち込まなかったのは、メアリー・ケリーが指摘しているように、それが“an episode that Parton definitely wanted to forget and wished she could efface.”（Kelley 266）だったからだろう。

にもかかわらず、このエピソードをファニー・ファーンは『ルース・ホール』の翌年に発表された長編第2作の『ローズ・クラーク』（1856年）のなかで副次的登場人物ガートルード・ディーンの口を借りて忠実に再現している。ガートルードは最初の夫アーサーに死なれた後、ファリントンと同じようにふたりの連れ子がいるジョン・ストウルと再婚するが、『題名のない本』のマイラと同じように、“a conscientious *Christian*”（234; emphasis in original）と思っていた相手がまったくの仮面紳士であることに気づいた彼女は、“The conviction that came slowly—but surely—that he was a hypocrite, and a gross sensualist. That it was passion, not love, which he felt for me, and that marriage was only the stepping-stone to an else impossible gratification.”（235）と告白している。さらにジョンとのセッ

クスに対して嫌悪感しか覚えない彼女は“O, the creeping horror with which I listened to his coming footsteps! I sprang from my seat when his footfall announced his approach—not to meet him, as a wife should meet her husband, as I in happier days had met Arthur—to throw out my arms despairingly for help, and then sink back into my chair, and nerve myself with a calm voice and shrouded eye to meet his unacceptable caresses.”(235)とも語っている。こうした彼女の言葉は19世紀の小説には珍しく直接的な表現で“marital rape”が日常的に繰り返されたことを示している。なお、同様の場面が『メアリー・リンドン』にもあったことを付け加えておこう。

ガートルードはまたジョンとの関係が悪化した時期について、“Whole days he passed without speaking to me, and yet, at the same time, no inmate of a harem was ever more *slavishly* subject to the gross appetite of her master.”(245; emphasis added)とも打ち明けている。ここでの“*slavishly*”が暗示しているように、彼女がジョンとの結婚生活において性的奴隷の状態に置かれていたという事実は、すでに取り上げた『メアリー・リンドン』や『題名のない本』においてもまた既婚女性が夫に隷従させられていたことを思い出させるではないか。ファニーの実体験に基づく悲惨な再婚生活の実態が『ルース・ホール』で紹介されていたら、冒頭の主人公の幸福な結婚との対比において見事な効果を発揮していただろうという思いを禁じ得ないのだが、ファニーが消し去りたかった不幸な結婚という主題がひそかに、思いがけない形で『ルース・ホール』に忍び込んでいることもまた否定できないのだ。

ルースは社交界の花形として羨望的となっているメアリー・レオンと近づきになるが、裕福な夫と結婚して何不自由ない生活を送っているかに見える夫人を観察しているうちに、“under that faultless, marble exterior, a glowing, living, loving heart lay slumbering”(51)と感じると同時に、いつでもどこでも“the same immobility of the cold, stony, gray eye”(50)が変化することのないレオン氏に対しては直感的な反発を覚えてい

る。やがてルースに心を開くようになった夫人は、夫から与えられる宝石やドレスなどを“all those pretty toys to satisfy my heart-cravings”と呼び、“[T]hey, equally with myself, are necessary appendages to Mr. Leon’s establishment.” (51)と語っている。ニコルズの作品に登場するもうひとりのメアリーもまた、夫にとって“an appendage, a thing with no will of my own”だったことを思い出すべきだろう。

それから数か月後、ヨーロッパ旅行に出かけたレオン氏によって精神病院に送り込まれたメアリー・レオンは、誰にも看取られることなく孤独死を遂げる。偶然そのことを知ったルースに手渡された夫人のメモには“I am not crazy, Ruth, no, no—but I shall be; the air of this place stifles me; I grow weaker—weaker. I cannot die here; for the love of heaven, dear Ruth, come and take me away.” (112)と書かれているのだが、この精神病院は牢獄としての家庭の延長と解することができるのではないか。そこに収容されている女性患者のひとりについて看護人が口にする“she is chained” (111)という言葉は、以前に涙ながらに身の上を語ったメアリーが“The chain is none the less galling, because its links are golden.” (52)と呟いていたことを思い出させずにはおかない。黄金の鎖に縛られた彼女にとって、家庭は精神病院の“cold, gloomy vault” (111)とまったく同じ空間であり、そこでもまた彼女は“the air of this place stifles me”と叫んでいたのではないだろうか。

だが、冷酷無情な夫によって精神病院に閉じ込められていたのはメアリー・レオンだけではなくた。1852年に発表された短編「メアリー・リー」の主人公もまた夫のパーシー氏によって精神病院に閉じ込められ、メアリー・レオンと同じように、その一室で悲劇的な死を迎えている。『ルース・ホール』のメアリーは“I want to be alone.”と看護人に告げた後、“[S]he lay quietly asleep, with her cheek in her hand.” (112)と書かれていたが、「メアリー・リー」のメアリーも“I want to be alone.”と訴えた後で最期の眠りにつき、看護人が室内をうかがった時には、“Mrs. Percy still lay there, in the same position, with her cheek nestling in the palm of her

little hand.” (88) と説明されている。

この薄幸のメアリーについて、作者は “Mary Lee had the misfortune to be very pretty, and the still greater misfortune to marry a jealous husband.” (83; emphasis added) と記しているが、この一文はファニー・ファーンの再婚相手のサミュエル・ファリントンが “a madly jealous man” だったという事実と切り離して考えることができない。“Mary Lee’s husband was patterned after Fern’s second husband in what was a marriage of convenience.” (Warren 135) とはジョイス・ウォレンの指摘だが、嫉妬深いファリントンと暮らすファニーは、精神病院の “cold, gloomy vault” に幽閉されたメアリー・レオンのような孤独感と絶望感を味わっていたに違いない。孫娘エセルが回想していたように、ファリントンが “every interest of any kind outside his own four walls which she might manifest” に対して嫉妬の炎を燃やす男だったとすれば、彼女も黄金の鎖につながれたような状態で “his own four walls” の外へは一步も踏み出すことができなかったのだ。

こう考えてくると、『ルース・ホール』の読者としては、ファニー・ファーンを経験した悲劇的な再婚という語られざるエピソードを常に意識していなければならないように思われる。地獄を見たメアリー・ニコルズやマーサ・タイラーと同じように、彼女にもまた当時の結婚制度の下で悲惨な苦しみを味わった数年間があったのだ。『ルース・ホール』には、“[W]hen I get to be a woman shall I write books, mamma?” と無邪気に問いかける娘のネティに、ルースが “God forbid, no happy woman ever writes.” (175) と答える場面が用意されているが、このファニーの実体験に裏打ちされた重い言葉に自伝小説の作者としてのニコルズやタイラーもまた大きくうなずいたのではないだろうか。

注

1 ここでの “lord and master” という表現は Lillie Devereux Blake の代表作のタイトル *Fettered for Life; or, Lord and Master* (1874) にも使われている。

² *Ruth Hall* の出版は公式には 1855 年とされているが、実際の刊行は 1854 年 12 月だった。

Works Cited & Consulted

- Baym, Nina. *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820–70*. 2nd ed. Urbana: U of Illinois P, 1993.
- Fanny Fern. "Mary Lee." *Fern Leaves from Fanny's Port-folio*. Auburn: Derby and Miller, 1853. 83–88.
 <www.merrycoz.org/voices/leaves/LEAVES00.HTM>
- . *Rose Clark*. New York: Mason Brothers, 1856.
 <<http://purl.dlib.indiana.edu/iudl/wright/VAC7390>>
- . *Ruth Hall and Other Writings*. Ed. Joyce W. Warren. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1986.
- Gura, Philip F. *Truth's Ragged Edge: The Rise of the American Novel*. New York: Farrar, 2013.
- Harris, Susan K. *19th-Century American Women's Novels: Interpretative Strategies*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Keeley, Dawn. "Ungendered Terrain of Good Health: Mary Gove Nichols's Rewriting of the Diseased Institution of Marriage." *Separate Spheres No More: Gendered Convergence in American Literature, 1830–1930*. Ed. Monika M. Elbert. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2000. 117–42.
- Kelley, Mary. *Private Woman, Public Stage: Literary Domesticity in Nineteenth-Century America*. New York: Oxford UP, 1984.
- Myerson, Joel. "Mary Gove Nichols' Mary Lyndon: A Forgotten Reform Novel." *American Literature* 58.4 (1986): 523–39.
- Nichols, Mary Gove. *Mary Lyndon: Or, Revelations of a Life: An Autobiography*. 1855. Charleston: Nabu Press, 2010.
- Nichols, Thomas Low, and Mary S. Gove Nichols. *Marriage: Its History, Character, and Results*. New York: Published by T. L. Nichols, 1854.
- Ranta, Judith A. "'A true woman's courage and hopefulness': Martha W. Tyler's *A Book without a Title: or, Thrilling Events in the Life of Mira Dana* (1855–56)." *Legacy* 21.2 (2004): 17–33.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. New York: Knopf, 1988.
- Silver-Isenstadt, Jean L. *Shameless: The Visionary Life of Mary Gove Nichols*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2002.
- Tyler, Martha W. *A Story without a Title: or, Thrilling Events in the Life of Mira*

Dana. Boston: Printed for the author, 1855.

〈<http://purl.dlib.indiana.edu/iudl/wright/VAC8130>〉

———. *A Story without a Title: or, Thrilling Events in the Life of Mira Dana*.
2nd ed., with additions. Boston: Printed for the author, 1856.

〈<http://purl.dlib.indiana.edu/iudl/wright/VAC8131>〉

Warren, Joyce W. *Fanny Fern: An Independent Woman*. New Brunswick, NJ:
Rutgers UP, 1992.

Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820–1860." *American Quarterly*
18 (Summer 1966) : 151–74.